

グラアル
聖杯、血、そして光

Grail, Sang et Eclair

——『アリマタヤのヨセフ』から『ペルスヴァル』を見る——

天沢 退二郎

聖杯物語群をめぐる諸問題の、原点にたちもどり、(グラアル)の出現をめぐる、クレチアン・ド・トロワのテクストをロベール・ド・ボロンのもので逆照射する試み——これがこの小論の意図である。⁽¹⁾

クレチアンの『ペルスヴァルあるいは聖杯の物語』⁽¹⁾ (一)

一八五年頃中断)においては、T写本でいえば全九二三四行中の第三二二〇行に、不定冠詞を冠した「*im Graal*」⁽²⁾として、血の滴る槍にはじまるいわゆる(聖杯の行列)の中心部に初めて出現する。これに対してロベール・ド・ボロンの『聖杯の由来の物語(アリマタヤのヨセフ)』⁽³⁾ (一二〇〇年頃)では、韻文ヴェルシオンでいえば全三五一四行中の第三九五五行に、はじめやはり不定冠詞を冠した「*im weissel* (器)」なる別の語として登場したオブジェが、以後九百余行の間に十一回にわたって登場

あるいは言及されたすえに、第九三六行にいたってはじめて「*Grual*」⁽⁴⁾という名に結びつくのが、初出である。両テクストにおける、「聖杯」⁽⁵⁾出現の異同と推移をつぶさに再検討してみよう。

まず、諸兄妹はすでに暗誦(そら)んじておられることであるが、クレチアンのテクストを掲げる。主人公の若者(ペルスヴァル)が、館の主人(漁夫王)と広間の中央で語り合っている——

とある部屋から一人の小姓が

Uns valles d'un [e] chambre vint,

白銀に輝く槍の

Qui une blanche lance tint

3192

柄の 中程を持って入ってきて

Empoignée par le milieu,

炬の火へ

Si passa par entre le feu

寝台に座る二人との間を通った。

Et cels qui el lit se seoient.

そしてその場にいた人たちはみな

Et tot cil de laiens veoient

3196

銀色の槍、銀色の穂先を見、

Le lance blanche et le fer blanc,

一滴の血が

S'issoit une goutte de sanc

槍の尖端の刃先から出てきて

Del fer de la lance en sonet

小姓の手のくじらまじ

Et jusingu' a la main du vallet

3200

その赤い血は流れ落ちた

Coloit cele goutte vermeille.

〔とあつて、〕のあと若者が不思議に思いつつも質問をさしひ

かえる次第と、それから別の二人の小姓が美麗な大燭台を掲げ

て通ったことが語られた後〕

一箇のグラアルを両の手で

Un gral entre ses deus mains

3220

ひとりの乙女が捧げ持ち

Une damoisele tenoit,

いまの小姓たちと一緒に入ってきたが、

Qui avec les valles venoit,

この乙女は美しく、気品があり、優雅に身を装っていた。

Bele et gente et bien acensee.

彼女が、広間の中へ

Quant ele fu laiens entre

3224

グラアルを掲げて入ってきたとき

Atot le gral qu'ele tint,

じつに大変な明るさでもたらされたので、

Une si grans clartezi vint

数々の蠟燭(ろうそく)の灯も

Qu'ansi perdirent les chandouies

ちようど太陽か月が昇ったとき〆

Lor clarté come les estolles

3228

星のように、明るさを失ったほどである

Font quant solaus lieve ou la lune.

ここで、あまりにも有名ないまの箇所、とくに重要なポイント

をあらためて強調しておく、

(1) 穂先から血が一滴生じて、柄にそってつたいおちる、血

の出る槍が、小姓の手に捧げ持たれて通る

(2) 次に別の二人の小姓が大燭台を掲げて通り、

(3) 一人の乙女が一箇のグラアルを捧げて入ってきて、じつに驚くべき明るさがもたらされる

右の(2)は、(3)の明るさを際立たせるためであり、(1)と(3)は、「血」と「グラアル」とが別立てであることを示している。

次にロベール・ド・ボロン『聖杯の由来の物語』韻文篇の場合を見よう。最後の晚餐の場面、イエスがシモンの家で弟子たちと食事をしているところへ、ユダがユダヤ人たちを導き入れ、イエスに接吻すること、これがイエスだと教えて「この人をしっかりと捕えろ、驚くべき力のある人だから」と指示し、ユダヤ人たちはイエスを連れ去る——そこで弟子たちは惑乱し

Or sunt li deciple esgaré

大いに悲嘆にくれた。

Et sunt de cuer mouit adolé.

そこに一個の典雅な食器が残された

Leenz eut un veissel mouit gent

キリストが聖なる食事をした器だ

Ou Criz feisoit son sacrement.

一人のユダヤ人がこの器をシモンの家で

Uns Juifs le veissel trouva

396

見つけ、手中にして、保持した。

Chîés Symon, sel prist et garda.

イエスはそこから連れ出され

Car Jhesus fu d'illec menez

ピラトの前に引き出されたからである

Et devant Plate livrez.

これが問題のオブジェの初出だが、ごらんのように、不定冠詞つきながら、ただの平凡な器ではなく、「mouit gent」と形容されていることが注目される。ここで「gent」という形容詞が見かけ上も豪華な、堂々たる形容を言っているのか、あるいはそれが「キリストが食事に使われた」という形容詞節に心的影響を受けた、心理的・意識的高貴さ・特別さなのは、一概に区別できない。

さて、ユダヤ人の群集はイエスをピラトの前に引き出し、言葉のかぎりをつくして告発するが、ピラトは根拠不十分として肯かず、これで不当に予言者を殺したあと、上司に詰問されたらどうにか私を弁護してくれるのかと反問すると、ユダヤ人たちは大声で「われらにこの男の血を降らせよ」と叫んで、イエスを拉し去る。ピラトは水で手を洗い、「かくのごとく、私にイエス殺しの罪はない」と言う。あのユダヤ人はシモンの家で手に入れた例の「食器」を持参してピラトに贈り、ピラトがそれを保管しているところへ、イエスが殺されたことを知っ

たアリマタヤのヨセフが憤慨してピラトを訪れ、私と五人の騎士はあなたに仕えてきたが、その報酬をもらいたいと要求、何でもあげるといわれて、あの予言者の遺体をいただきたいと言ひ、もらえる約束をとりつける。これをユダヤ人たちは拒絶し、ひと悶着あるが、ピラトはニコデモを介して約束を履行させ、かつあの「食器」をヨセフに与え、イエス復活の危険があるからというユダヤ人たちの条件を容れて、三日後にヨセフはイエスの遺体を十字架から降ろすが、この前後が重要な箇所⁽⁴⁾である――

そこで二人〔ニコデモとヨセフ〕は丘に登り

Et cil andui en haut monterent
イエスを十字架からはずした。

Et Jhesu de la crouiz osterent.

ヨセフは遺体を両腕に抱えて

Joseph entre ses braz le prist,

そしてその地上に置こつて、

Tout soufí a terre le mist,

遺体を大切に扱って

Le cors atourna belement

すっきり奇麗に洗い清めた。

Et Le lava moult nestement.

洗つてゐる間に

Endementier qu'il le lavoit

きれいな血が、出血している傷口から

vist le cler sanc qui decouroit

洗われたために

De ses plies, qui li seinoient

流れ出ているのを見た

Pour ce que laves estoient.

そこでかれは思い出したのである、

De la pierre adonc li membra

〔槍で〕切られた脇腹から

Qui fendi quant li sans raia

血が奔ったとき足の下の石が裂けたことを

De sen costé ou fu feruz

そこでヨセフはすぐに走こつて

Adonc est il errant couruz,

あの「食器」のさうめん行き、手にとるよ

A son veissel et si l'a pris

血が流れ出る場所にそれを置いた

Et lau li sang couloit l'a mis,

うすすれな、よりよら状態を

Qu'avis li fu que mieuz seroient

血の雫がその中へ落ちるであらう

Les goutes ki dedenz cheroient

556

560

552

564

他のところに落ちるよりも

Qu'en lui ou mestre les pelist,

——他の場所へいんなに苦心しても——

Ja tant pener ne s'en seüst.

568

こつこつあの「食器」の中へ

A son veissel ha bien forchies

傷を拭いてはしほり集めたのだった、

Les plaies et bien nestoies,

イエスの手の傷も、脇腹の傷も、

Celes des meins et dou costé,

足の傷のまわりも、万遍なく。

Des piez environ et en le.

572

今や血はすべて集められ

Or fu li sans touz receütz

「器」の中へ収められた。

Et ou veissel touz requelluz.

ヨセフは遺骸を、

Joseph le cors envelopa

買っておいいた布に包み

En un sydoine qu'acheta,

石棺に容れたが、

Et en une pierre le mist

576

それは自分用に選んであったものだ

Qu'il a son wes avoit eslist,

そして石板で蓋をした

Et d'une pierre le couvri

これを私たちは墓石とよんでいる。

Que nous apelons tumber ci.

580

長い引用になったが、ここで注意しておきたいことがある。一つは、〈最後の晩餐でイエスが用いた食器〉と〈十字架上のイエスの脇腹から迸った血を受けた器〉とが、別々のものではなく、しかも厳密にいうと全く同一のものとは必ずしもいえない、ということだ。むしろ、前者が後者になるのである。つまり、前者であつた器に、ヨセフが聖血を容れて後者たらしめていく過程が、右の箇所じつに入念に、順を追って明らかにされているのである。

その、聖血採取のしかたも、『ベルレスヴァウス』他のテクスト^⑤や、ある種のイコノグラフィーに見るように、十字架上の予言者の傷から斜めにひとすじほとばしる血を、下で容器をさしのべてそれに受ける、などというものではなくて、いったん十字架から地面へおろした遺体の、傷を洗うとそこから流れ出る血を、容器をあてがって受け、さらには布で、手・脚・脇腹についた血を拭い、その布をしぼって血を受け、さらにまた拭ってはしぼるといふふうに、最後まですべて収集しつくす

というものだ！

これはもう、宗教的というよりは、むしろ強迫的・偏執的な行為といっている。なぜなら——とテクストは前以て言っている——ヨセフはこれほどまでにイエスを愛していたのだ、と^(15. 186)。それはさておき、この入念・徹底的な聖血採取が、最後の晚餐の「veissel」を、聖血のための容器たらしめ、さらにこれが「Gral」なる名前の秘密を獲得するのに必須の過程の一つであるにちがいないと思われる。しかし、もう一つ、次の段階が待っている。

ヨセフは、イエスの身体を石棺に収めたあと、自分の家へ帰って寝た。ユダヤ人たちはピラトにここまでの経緯を語り、ピラトは昼も夜も、武装要員に命じて石棺を見張らせた。三日目にイエスが「復活」といわれていたからである。この間にイエスは地獄下りをして、アダムとイヴをはじめ、死後悪魔の支配下に置かれていた聖人や聖女や、徳あるすべての人々を解放してから⁽⁶⁾、戻ってきて、復活し、マグダラのマリヤや、使徒たちのところに姿を現わしていた。しかしもちろん、ヨセフが遺体を収めたはずの石棺の中にその姿はなくなっている。ユダヤ人たちはこの消失の責任をニコデモカヨセフに負わせようと二人を探し、ニコデモはいち早く逐電、ヨセフは捕まわって拷問されたあげく、深い狭い縦穴の底という牢に幽閉される。そこへ、イエスがあの「食器」とともに出現するくだりが、こ

うなっている——

神は神のために苦しむ者に
Car ce que pour lui souffert ha
大いなる報いを下された

Mout tres bien li guerredonna.

716

つまり牢の中なるかれのもとへ下ってきて

A lui dedenz la prison vint

その「器」を携えてきたが

Et son veissel porta qu'il tint

それは大いなる明るさを投げかけ

Qui grant clarté seur lui.

牢の中をリリリと照らし出した

720

Si que la chartre enlumina;

ヨセフはこの明りを見たとき

Et quant Joseph la clarté vist.

心は歓びにみたされた

En son cuer mout s'en esjoist.

神はその「器」を持って来られたが

Diex son veissel li aporroit

それはヨセフが神の血を集めたあの器で、

Ou son sanc requellu avoit.

724

その器を見たとき

De la grace dou saint Esprist

〔かれは〕聖霊の恩寵で満たされた

Fu taouz pleins, quant le veissel vist,

……

（一）で初めて、問題のオブジェ「Veissel」が、強烈な「明るく claré」を発するという属性を明らかにするのである。（一）

このあと、ロベール・ド・ボロンンのテクストは、イエスがアリマタヤのヨセフにその子々孫々へかけてこの聖遺物を相続・保持することを命じてこれをゆだねること。そして、のちの聖体拝領儀式において、この器が「聖体入れ calice」となり、墓の石蓋が「聖体皿 patene」となることなどをイエスが語る場面などがあるが、これらは本稿の目的に直接関係がないので、ふれない。

さて、以上の、ロベール・ド・ボロンンの記述——最後の晩餐の場へユダヤ人が踏み込んでイエスを捕え、法官ピラトの対応を不服として自分たちで十字架に架けたあと、遺体がピラトによりヨセフに与えられ、いったん降架して葬ったのち、イエスは復活、遺体は消失、ヨセフが入牢するというみちすじは、注でも記しておいたように、おおむねニコデモの福音書（ピラト行伝）に準拠していると考えられる。しかしもちろんで、『ニコデモ書』には、最後の晩餐の食器の運命、そこに聖血が受納されることなどは記述がない。

したがって、右のような、聖杯の由来の前史段階に明らかでない「血」へのオブセッション的な言及は、伝存テクストとしては、ロベール・ド・ボロンに特徴的であるといつていい。

ここで、最初に引いたクレチアンの『聖杯の物語』のテクストを思い出してみよう。『聖杯の物語』では、燭台を持った小姓たちを先立てて、まず、

(1) 穂尖から血が一滴出現し柄をつたい落ちる槍を、一人の小姓が保持して登場

次に数人のやはり燭台を持った小姓たちを先立てて

(2) 光り輝くグラアルを両手で支えた一人の極めて美しい乙女が登場

そのあと銀の肉切台を持った乙女の続く「行列」が、主人公の前を通過し、それが何度もくりかえされる。

この行列は、「事件」ではなく「儀式」の性格がよい。

これに対して、ロベール・ド・ボロンでは、

まず、最後の晩餐のとき踏み込んだユダヤ人たちのよってイエスが拉致された場面のラストに、

(1) 一人のユダヤ人が、いまの晩餐でイエスの用いた「食器」を発見

(2) ユダヤ人たちがイエスをピラトの前に引き出し、対応に不服でイエスを拉し去った直後に、(1)のユダヤ人が「食器」を持参してピラトに渡す

(3) ピラトは「食器」を、アリマタヤのヨセフに与える

(4) ヨセフはイエスを十字架から降ろし、遺体を洗い清める際にあの食器に血を入念に収集する。

(5) のちに捕えられたヨセフが入牢しているところへ、復活したイエスが「食器」と大いなる輝きとを伴って出現、「食器」をヨセフに与える

というように、五段階の言及が、いわば五つの事件の進行を示す五つのテクストの「行列」として提示されていることになる。

次に、ここまででの、両者の比較から、次の三点がみちびかれる――

1 クレチアンでは、血は槍から出るが、グラアルとは直接関係がない。ロベールでは血は「器」が受ける

2 クレチアンでは血は一滴のみ。ロベールでは多量に、くりかえし集められる。

3 クレチアンでは、グラアルは最初から光り輝くオブジェとして登場。ロベールの「食器」は、最初に「非常に立派な」という形容詞を付されるのみだが、最終的に驚くべき輝きとともに現われる。

右の三点について付説すれば、

1 では、ロベールにはそもそも槍はなく、

2 では、クレチアンのテクストにはそもそも、「血」といえば他に《三滴の血》という印象的なシーン（傷ついた鳥が雪の上に落した三滴の血がベルスヴァルに恋人の白い肌

と美しい血色を想起させる）があつて、いずれも、一滴または三滴と、量的に最少限であり、ロベールのごとき、大量出血へのオブセッションはない。

3 では、グラアル登場場面において、グラアルの輝きは、それを捧げ持つ乙女の驚くべき美しさと殆どわがちがたく相乗的であり、ロベールにおいても、牢内への出現シーンで、あの強烈な輝きの光源は復活したイエスキリストそのものなのか、「器」なのか殆どわがちがたく、相乗的である。

そして最後に、ロベール・ド・ボロンにおける「グラアル Grail」なる語の初出場面を検討したい。

先述したように、イエスキリストはアリマタヤのヨセフに、さまざまな教示を与えたあげく、《こうして、器をかれに与えた Adone le vessel li balla》（韻文篇第九三七行。ここを散文ヴェルシオンはもつとはつきり《Ainsi balla Jesucrist le vessel a Joseph》と書いている。オゴーマン本百十五頁）と明記されるのだが、その直前、第九二九―九三六行に、話者（ロベール）による次のような地の文が挿入される――

《わたしはとても話すも語るもよくしない

—— Ge n'ose conter ne retenir.

だいいち、ではしないであらう、

Ne je ne le pourroie feire,
たえぞうしたいと思つたところぞ

Nais se je feire le voloie,
もし、あの大きいなる書物

Se je le grant livre n'avoie
そこに偉大な学僧たちが語りかつ書いた

Ou les estoires sunt escrites,
さまざまなる由来の書かれた書物を持たなかつたとしたら。

Par les grantz clers feites et dites.
そこには書かれてあるのだ、

La sunt li grant secret escrit
グラアルと名付けられ語られた大いなる秘密⁽⁸⁾が。

Qu'en numme le Graal et dit. 936

クレチアン・ド・トロワ『聖杯の物語』では、主人公の若者が漁夫王の城で聖杯の行列を目撃しながら、心に抱いた質問を口に出さなかつたために大切な機会を逸したあと、従姉により、醜い乙女により、そして伯父にあたる隠修士により、その体験の意味と原因を教示されるが、その最後の、隠者による教示の中に、漁夫王の父がああの間で、グラアルにより（オス

ティーオisie）を供されて多年生き永らえていること、そして

《グラアルとはかくも聖なるものなのぢや

v.6425

と教えられる箇所には、ここは対応していると考えられる（ロベールにおいても、「グラアル」なる名称の意義はさらに第二六七二行以下でも説かれる……クレチアン作品が作者の死によつて中断しなかつたならば、やはり幾度も説かれたであろうが……）

*

こうして、ロベール・ド・ボロンのテクストによりクレチアンのそれを逆照射するならば次のことが想定される――

『聖杯の物語』第三一九八行に出現する槍先の「血」と、第三二二六行に登場するグラアルの驚くべき「光」とは、本来的に一つのものに由来する根源的なるものであつて、その相乗作用こそが、「un graal」を「le Saint Graal」たらしめた（ている）契機だったのである、と。

そして補言すれば、「血」がクレチアンでは「一滴」で足りたのは、異教的源泉以来の抽象化あるいは象徴化のおかげであり、ロベールにおいては、強力なキリスト教化、とくに新約の掟を正面に打ち出す必要から、オブセクションとよびうるほどの強調・多量化が必要とされたのであろう、と。

注（引用文献の細目は末尾ヒプリオグラフィーに一括して

ある)

(1) 本稿は、前稿「聖杯の二つの相」(本誌第11号所収)の要略という意味ももっている。また、ほぼこれと前後して刊行予定の明学仏文論叢38号に掲載される拙稿「食器から聖杯へ」は本稿と相似点・相異点を併せもつ、一種の姉妹篇であることをお断りしておく。

(1 bis) *Chevien de Troyes, le Conte del Graal* の引用は原則としてローチ本(Droz, 1959)により、必要に応じてバスビー本(Niemeyer, 1995)を参照する。

(2) ただしT写本では厳密にいうと「Un」ではなく、「••」とローマ数字で記されており、これは不定冠詞というよりも数詞「1箇の」である。ちなみに、三三三一行で別の乙女が持っている「肉切台」もまた「••tailloir」であって、「1箇の肉切台」となり、「グラアル」の場合と対をなしている。

(3) Robert de Boron, *Roman de l'Estoire dou Graal* の引用はむしろオコーナーマン本(*Joseph d'Arminhac* ed. by Richard O'Gorman, PIMS, 1995)により、必要に応じてニツェ本(CEMA, 1999)を参照する。

(4) 四福音書はいずれもヨセフによる降架および／あるいは埋葬を簡略に語っていて、マタイでは「ヨセフはイエスの遺体を受取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め」(27の59-60)、マルコでは「ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降

ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め」(15の46)、ルカもこれと殆ど同じ(23の53)、ヨハネでは、ヨセフが「十字架から遺体を取り降ろした」(19の39)あと、ロベールのテクストと同じく《彼ら「ニコデモとヨセフ」がイエスの遺体を受取り、香料をそえて亜麻布で包んだ》(19の40)とあるが、この一連の行動の際に聖血を何かの器に採取したくんだりは一切全くない。当該箇所についてはニコデモ書も同断で、《この者「ヨセフ」という名の者》が(……)イエスを十字架からおろし、清潔な亜麻布にくるんで、まだ誰もいれられたことのない岩をくりぬいた墓におさめた》(11の3)とあるだけである。(田川建三訳による。田川訳はギリシャ語Aに拠っているが、ガストン・パリス編注の中世仏語テクストAの $\alpha\beta\gamma\delta\epsilon\zeta\eta\theta$ とほぼ同じ内容。)

(5) 聖杯物語群における聖血採取の記述は二種類の系統にわかたれる——一つはまだキリストが十字架上にある間に血を器に受けるもので、もう一つは十字架から降下した後ヨセフが遺体の埋葬準備の際に採取する(オゴードン注)。ロベール・ド・ボロンのテクストは後者の系列に属するのに対して、前者の系列としてオゴードンがあげている『第二続篇』『マヌシエ続篇』および『ペルレスヴァウス』のうち、『ペルレスヴァウス』では、

《そこでピラトは彼「アリマタヤのヨセフ」に救世主の遺体を与えたが、ピラトはヨセフが遺体を十字架から降ろ

した後エルサレム市中を乱暴に引きずって、どこか市外の荒地に放置するにちがいないと思っていたのであった。しかし良き兵士(ヨセフのこと)はそんなつもりは全くなく、遺体をできる限り大切に扱って聖なるモニユメントの傍らに安置し、イエスの脇腹を刺すのに用いられた槍と、イエスが十字架に架けられたときその傷から流れる血を集めた聖なる器とを、大事に保持した。

Et por ce li fist Plates le don
du cors au Sauveur, qu'il cuida qu'il le deüst viainement
trainer parmi la cité de Jerusalem quant il l'eüst osté de la croiz,
e lessier le cors hors de la cité en aucun vilain leu; mes li
buens souldoiers n' en ot talent, ainz emora le cors au plus
qu' il pot e cocha o saint monument, e garda la lance, de coi il
fu feruz o costé, e le saintisme vessel, en coi cil qui le crevoient
pouurement receuillirent le sanc qui decoroit de ses plates
quant il fu mis en la croiz.» (Pellesvaus, éd Nitzze, II,28-35)
なお、ロベール・ド・ボロンが何故か、十字架上からの出血でなく地上降下後の出血の採取を選んだかについては、横山安由美氏の次の論文に仮説が提出されている——A. Yokoyama «Robert de Boron et les idées eucharistiques» (フエリス女学院大学国際交流学部紀要「国際交流研究」第四号、二〇〇二年三月、二一頁)が、これは本稿の主旨とは直接関係がないので詳しくは紹介しない。
(5 bis) ピラトが器をヨセフに与えるに際して《そな

たは本当にあの男を愛していたのだな》と語りかけ、ヨセフが《おっしゃる通りです》と答えるところがある (vv509-511)

(6) この、イエスの地獄下りの物語は、『ニコデモの福音書』の眼目であり、このために中世にはニコデモ書は広く読まれたのであって、ロベール・ド・ボロン作品の写本にもその情景が、美麗な彩色挿絵に描かれている。

(7) 『ニコデモの福音書』には、もちろん(アラアル)は出てこないが、この、獄中のヨセフのもとに復活したイエスキリストが顕現した場面をヨセフ自身がユダヤ人たちに向かつて語るくだりには——

《あなたたちは私をある建物に連れこみ

En une meisun me meisies,

そくくしかりと閉じこめた

Si me fermates e tenistes.

それは私たちのサバトの日で、

Le jor de nostre sabbat fui

いつものようにお祈りをしていると、

En oreisun si cum jo dui;

夜更けにイエス様が来られて

La nuit après i vint Jesus

壁を持ち上げられた

Ki les pareiz fist lever sus.

稲妻のように主が来られるのが見え、

Cum fudes le vi jo venir,

家の四隅を開け放たれたから

Les quatre angles fist aovrir.

私は倒れてしまった

De la pour ke j'oi chait;

すると主は私を起(こ)して下さ(くだ)さ(さ)る

Releva mei, sue merci;

1225

露で私を洗われ

D'une rosée me lava,

私の顔を拭(ぬ)って接吻(くちくち)な(な)った》

Ma face terti, puis me beisa,

動揺したヨセフが「あなたはエリアス様(さま)で」と訊ねると。「私はイエスキリストだ」と答えるのである(ニコラモ書中世仏語版A、第十五章。ギリシヤ語版からの田川建三訳にも殆ど同じ箇所がある。教文館版の『聖書外典偽典6』二〇一頁「すなわち(こ)こでイエスの顕現が「稲妻のように cum fudes」と、眩(くら)いばかりの輝(きら)きを伴(とも)っている(こ)こに留意(れい)すべきである」。

(8) この「秘密」については、オコーナーマンの「韻文篇注解」が二頁余にわたって、先行研究の諸説と、他の聖杯文学諸テキストの用例を検討しているが、要するにこれは「言葉で言いあわせぬもの」「口に出すことのでき

ぬもの」であると言(い)うに尽(つ)きるのであって、だからこそ、『聖杯の探索』で騎士たちは「サン・グラアル」を探索して遍歴しながら、ついに(最後に)「サン・ヴェセル」の秘跡を目撃することができても、その直後から「私は「サン・グラアル」を見た」としか言うことができないのだ。さらに溯(たど)れば、およそ、ペルスヴァルが最初に漁夫(りく)王(わ)の城(しろ)でグラアルの行列を見たとき、なすべかりし発語(はつご)ができなかったのも、その真因(まゐ)は(こ)こにあった(私の修士論文——未刊行——における仮説)。

ビブリオグラフィ

- Chretien de Troyes, *Le Roman de Perceval ou le conte du Graal*, publié par William Roach, Droz, 1959.
- Chretien de Troyes, *Le Roman de Perceval ou le conte du Graal*, édité par Keith Busby, Niemeyer, 1995.
- Robert de Boron, *Le Roman de l'Estoire dou Graal*, édité par William Nitz, Champion(FMA), 1999.
- Robert de Boron, *Joseph d'Arimatee: A Critical Edition of the Verse and Prose versions* by Richard O'Gorman, PIMS, 1995
- Trois versions de *l'Evangile de Nicodem*. Publiées par Gaston Paris & Alphonse Bos, Firmin Didot (SATF), 1885.
- 田川建三訳「ニコラモ福音書」『聖書外典偽典6』新約外典I、

教文館、一九七六年。

Le Haut Livre du Graal, *Perlesvans* I, Edited by William A. Nitzé
and T. Atkinson Jenkins, The University of Chicago Press, 1932.

横山安由美「中世アーサー王物語群におけるアリマタヤのヨ
セフ像の形成——フランスの聖杯物語——」溪水社、二〇〇
二年。